

光るアラマタ肖像画



夜の標本の肖像

まずモノの方を一見してほしい。ブラウン管に映しだされたアラマタの肖像？ いや、ちがう。真つ暗闇の部屋で発光する大きな標本箱を四つ、寄せてみたただけなのだ。

この標本箱、中をよく見てもらえばわかるように、虫ピンで一枚一枚留められた小さなフィルムが並んでいる。このフィルムには、アラマタが収集している博物図鑑や引札、解剖図、珍奇変態図のたぐいが、一枚ずつプリントされている。ちょうど昆虫標本のようになっており、一箱に三、四千枚ある。四箱だから、なんとトータル一万枚以上だ！

しかし、ミクロの絵を印刷した極小フィルムを一万点、虫ピンで留めただけじゃおもしろくない。これを四箱並べれば、これまたビ

ツクリ、アラマタの肖像が浮かびあがるのだ。一点一点の絵の濃淡を活かして、みごと肖像画に再合成されるという仕掛け。

しかし変人精神はそこでもまだ終わらない。これに蓄光塗料（夜光塗料の親戚みたいなものだ）を塗った小さなボードを敷き、驚くなかれ闇の中にボォーツと青白く輝くようにした。日中の太陽光か、あるいは強い人工光を照射しておいて、暗い部屋に持ち込むと、数十分間、この肖像は蛍光を発し、さながら亡霊のごとく闇に浮かびるのである！

このものすごい作品を仕上げたのは、高橋昇という三十歳そこそこの天才である。古今の天才の例に漏れず、今の所ものすごく貧乏だが、日々マッドな発明にいそしんでいる。

高橋青年がこういう妙な創作を思いついたのは、日本語の文字つまり漢字や仮名にはそれぞれに《濃度》があることを発見したから



だった。濃度があるなら、その濃淡を使って絵が描けるはずだ。コンピュータ少年だったかれは、「日本語の文字を使って絵を描くソフト」をつくった。

まず、何でもいいから元絵をインプットする。たとえば国会議事堂の写真だ。次に「国会乱闘」だとか「牛歩戦術」だとか「バカヤロー」といった国会ゆかりの日本語を極力たくさん入れる。あとはコンピュータが元絵にあわせ、各日本語の濃淡を計算し、適当な文字を絵に置き換えていく。これが進歩して、アラマタの顔を描くことが可能になった。あとは何でも来い、だ。

しかし、コンピュータから出力したフィルムを一旦バラバラに切り、その下に蓄光塗料板を付けてピンで留める作業に三か月かった。指が血マメだらけとなり、あまりに苛酷なので、二作目はトライしていないという！

